

## 第25回 夏の花火か？

IT生

北朝鮮のミサイルが飛び交っている。夏の涼といえば、花火なのに、それほどの風情はない。打ち上げる方も打ち上げる方だが、警報（Jアラート）がまずいと文句をいうほうもいうほうである。

だいたい、安全なんて、人口の数だけパターンがある。日本なら1億2000万とおりのことになる。それだけの安全を担保するのは誰か？

一番現実的で効率的なのは、「本人」である。もちろん、幼子や動きのとれない、いわゆる「災害弱者」など、自力でできない人もいるが、そこは何らかの方法で人の手を借りるしかない。



北朝鮮のミサイル発射を報じた新聞一面

ともあれ、政府が、北朝鮮の攻撃？に対して、Jアラートなる警報システムを構築したという現実を知れば、「国はそれほどの切迫感をもっているのだな」と解釈し、あとはその切迫感をもってして自分たちで身を守るとするのが正しい対処法である。たとえ、攻撃を受けたところで、自分の身の安全を確保できれば、警報がよかったのか、悪かったのかなんてどうでもいいことなのである。

というような、割り切り方（冷静な判断）は、ふだんの自然災害への「防災の心得」が根付いていてこそ可能なのだ。決して、警報のノウハウのたぐいのものではない。

寺田寅彦師はいう。

「○国や△国よりも強い天然の強敵に対して、平生から国民一致協力して適当な科学的対策を講ずるのも、また現代にふさわしい大和魂の進化の一相として期待してしかるべきことではないかと思われる」

これまで幾度となく書いてきたが、師の言葉から80年。まっさらな警句として受け止められるのは、いかがなものだろう、か…。

（平成29年8月）